

カミーユ・ピサロのルーアン版画連作における古い通りの主題について

慎ディア(早稲田大学)

本発表では、1855年以來フランスを拠点に活動した画家カミーユ・ピサロ(Camille Pissarro 1830-1903)がルーアンの通りを主題に制作した一連の版画作品について考察する。

フランスでは1830年代から版画技法の一種であるエッチングが見直され、1862年に設立された腐食銅版画家協会の存在は多くの芸術家たちが版画制作に取り組むきっかけとなる。ピサロもその一人で、印象派の画家の中でも最も版画に関心を寄せ、1863年頃に初めて版画を制作して以来、約200点を数える作品を残している。だが、ピサロは生前5点の版画しか出版しなかったこともあり、研究の歴史は浅く、その多くが概略的な解釈にとどまる。

デルテュが1999年に編纂した版画のカタログ・レゾネを見ると、作品の主題はポントワーズ、エラニー、ルーアンの光景に集中している。ポントワーズとエラニーは画家が長年住んでいた農村であるのに対し、ルーアンは画家が4回のみ訪れた都市である。1890年代に入り、画家はルーアンを含め、パリ、ディエップ、ル・アーヴルといった都市を主題に300点以上の油彩画を残すものの、版画についてはほとんどルーアンを取りあげている。つまり、ピサロの版画を理解する上で、ルーアンを主題に制作された版画の研究は重要なものと考えられる。

ピサロはルーアンで50点以上の油彩画と40点以上の版画を制作するが、通りの主題は一部を除いてすべて版画で制作されている。画家はルーアンで約10本の通りを描き、その中で最もよく言及されて来たのがグロ・オルロージュ通りを主題とした作品である。ピサロがこの通りを描く際、ロマン主義の画家ボニントンによる同主題の作品を参考にしたことが指摘されている。また、サン・ロマン通りを描いた作品の背景について、先行研究では、当時この通りが壊されつつあった状況との関連性が言及されている。以上のように特定の通りについての細かい指摘はあるものの、包括的な解釈はいまだ充分ではない。

ピサロは版画を一つの独立した芸術手段としてみなしており、実際、いくつかの版画を油彩画と共に展覧会に出品していた。発表者はピサロが古い通りを主題とした版画を多く制作した理由に、画家の版画にみられる技法上の特性が大きく関わっていたと考え、この点に着目して考察を進める。まずルーアンで最初に版画を制作し始める1884年頃の表現の変化を分析し、次に油彩画と版画との違いを見ていく。以上の分析をもとに、ピサロが古い通りを主題に版画を制作した理由について考察し、ピサロの画業における版画の意味を明らかにする。